

九 アメリカで製菓技術を勉強し

西洋菓子^{がし}を日本にもたらした

森永^{もりなが}太^た一^{いち}郎^{ろう}（一八六五〜一九三七）



西洋菓子をつくった森永太一郎
(提供森永製菓株式会社)

※こしだけ
腰岳^{こしだけ}から見る伊万里市街^{い万里しがい}は大きな入り江^えを背^せに、静^{しず}かなたたずま
いを見せています。

昭和十年（一九三五）、白く長いみごとなあごひげをたくわえた
老人^{ろうじん}が、幼^{おきな}いころ自分を育ててくれた故郷^{こきょう}の青い海をかんがい深く
見つけていました。その老人こそ西洋菓子の作り方をアメリカで学
び、日本にもたらした森永太一郎でした。

今から百年ほど昔、明治十二年（一八七九）ころの伊万里の港には、
東京^{とうきょう}・大阪^{おおさか}からの船^{ふね}が出入りしていました。そのころの太一郎は、
焼物^{やきもの}問屋^{もんや}に奉公^{ほうこう}していました。伊万里・有田^{ありた}焼^{やき}を積^つみ込^こむ船^{ふね}を見ながら、日本の商都^{しょうと}大阪^{おおさか}に出て、いつかは、
自分^{じぶん}も独立^{どくりつ}した店^{みせ}を開^{ひら}き、この町^{まち}に帰^{かえ}ってくることを考えていました。

十五歳^{じゅうごさい}になった時太一郎は、そのことを伯父^{おじ}さんに相談^{さうだん}しました。六歳^{ろくさい}の時、父^{ちち}をなくした太一郎にとつ
て伯父^{おじ}はただ一人のよき相談相手^{さうだんあいて}でありました。快^{こころ}よく頼^{たの}み事^{こと}を聞き入れ、大阪^{おおさか}に出^でしてくれました。

伊万里^{い万里}をはなれた太一郎は大阪^{おおさか}で、人の二倍^{にばい}も三倍^{さんばい}も働^{はたら}きました。

太一郎^{たいいちろう}は次の年^{とし}、東京^{とうきょう}の「有田屋^{ありたや}」で働^{はたら}き、二十一歳^{じゅういちさい}のとき、道谷^{どうや}商店^{しょうてん}で主人^{しゅじん}を助^{たす}けて働^{はたら}くようになりま



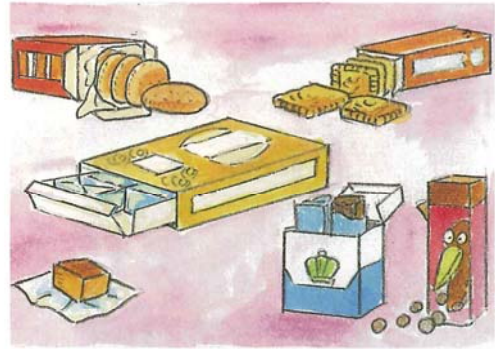
当時の陶器商家(野口榮一氏作の版画より)

した。しかし、太一郎が必死ひつしになつて働いたにもかかわらず世よの荒波あらなみがお店をおそいました。店の経営けいえいはだんだん悪くなつたのです。経営を立て直すお金を借りかりようと、故郷の伊万里に帰つてきましたが、不景気ふけいきはどこも同じで、どうとう金策きんさくができずに横濱よこはまにもどりました。困りこまはてた太一郎の耳に、太平洋のあなたのアメリカのにぎわいが伝わつてきました。日本で焼き物が売れないなら、いつそのことアメリカで売つてみようと考えた太一郎は、再び意欲いよくがわいてきました。周りのものまわに相談し、アメリカでの商売にかけてみたのでした。借金しゃっきんして商品の焼き物をそろえた二十四歳の太一郎は、船の中で働くことを条件じょうけんに乗せてもらうことにしたのです。

約二週間の航海こうかいで、船はサンフランシスコ港につきました。でも、すぐに上陸じょうりくすることはできません。乗客の中に、当時恐れていた天然痘てんねんとうの感染者じゃがいたため足止めされたのでした。じつと上陸の許可きょかが出るのを待ちました。やつと上陸が許ゆるされ、さつそく商品を売ろうとするのですが、言葉が通じないのです。通訳つうやくをやと、あちこちの店を回るのですが、太一郎の熱心ねっしんさだけではどうにもなりません。焼き物は、すでにアメリカに持ちこまれ広く売られていたのです。意気いけいこんでアメリカにきたものの、しかたなく安く売らざるをえませんでした。



船上の意欲に燃えている太一郎



今も愛されているお菓子

売上金はすべて日本へ送金してしまいました。日本で待っている家族や友人のことを考えると、気が重い毎日でした。生活する金もなくなり、途方に暮れてしまいました。

太一郎は、気を取り直して、何かを学び取って帰ろうと考えました。アメリカ人の老夫婦の家庭にやとわれ、雑役夫をしながらくらしをたてました。ある日近所の子供たちがめいめいキャンデーを持ちよって遊んでいました。その様子を見て、太一郎は日本の子供たちも菓子は大好きにちがいないと思いました。太一郎に大きな夢がわいてきました。

老夫婦は、熱心に働く太一郎をみて、言葉だけでなく、アメリカ人の開拓者精神やキリスト教についても、それとなく教えてくれました。

老夫婦の親切さに心を動かされた太一郎は、広く人々を愛することの大切さを学びました。二十六歳になった太一郎は、その年の夏、家族のことを思い、またキリスト教の伝道かねて帰国してみることになりました。帰国したものの、クリスマスチャンとしての太一郎は、なかなか理解してもらえませんでした。むなしく思いながら、子供たちのためのキャンデー作りに生涯をささげようと決意して、再びアメリカにわたりました。そして、菓子作りのブルーニング工場で働くようになりました。しかし当時のアメリカ人には、日本人の習慣や、日本の国がらなどは、よく理解されていなかったもので、がまんしなければならぬことが数多くありました。



処世訓「終始一貫」(「森永五十五年史」より)

ブルーニング工場で働く太一郎にとっての課題は、洋菓子の製造技術でした。しかし、簡単には教えてもらえそうにありませんでした。いくつもの原料を調合し、菓子を焼く微妙な温度を覚えなければなりません。だれよりも早く会社に出てきて、準備を完了している太一郎をみて、工場の主任は技術を教えないわけにはいきませんでした。

アメリカ大陸で修行した太一郎は、一日も早く日本に帰り、日本人にあつた洋菓子を作りたいと考えるようになりしました。帰りの船に乗った太一郎は、日本の商売についてもいろいろと考えました。アメリカで蓄えた商売の元手は、まさかのときに備え、三分の一ずつに分けて、つかうように決めました。三十五歳になつていた太一郎にとって失敗は許されなかつたのです。

明治三十二年八月十五日、東京溜池に小さな家をかきりて、アメリカ流の菓子を作りました。お店には、英語の看板をかかげました。ところが作った菓子が、なぜか返されてくるのです。太一郎は、この問題を解決しなければなりません。苦心の末、日本の気候を忘れていたのに気づいたのでした。菓子の表面がとけるのは、湿気のためだとわかつたので、それへの対策を考えました。このようにして、日本の人々に愛される西洋菓子が普及していきました。しかし、太一郎には、子どもに愛されるキャンデーづくりが夢でした。さらに研究を続け、ついに箱入りキャラメルを世に売り出すことになりました。これが、現在も、子供の手になぎられているエンゼルマークのお菓子なのです。